



1911(明治44)年に架設された日本橋(東京都中央区) 写真提供/賛田 岳和(2004年5月撮影)

日本橋架橋100周年特別寄稿

# 日本橋、

# 次の100周年へ向けて

日本大学理工学部交通土木工学科教授  
日本の石橋を守る会東京都会員

伊東 孝

「日本橋」は本年4月、架橋100周年を迎えた。国土交通省東京国道事務所は、経年劣化による橋側面や裏面からの雨水の浸み出しを補修するため、昨年の7月から今年の2月まで、「日本橋」の若返り工事を行った。私はこの補修工事の話聞いたとき、ぜひ確認したいことがあった。それは橋のアーチと橋面との間の詰めもの、つまり「あんこ」についてであった。

鹿児島県が甲突川の五大石橋を撤去とき、石造アーチ橋のあんこは、大小の石と泥であった。「西田橋」は、撤去される前に振動調査が行われ、石橋が大きな荷重に対してたわむという驚きの報告がなされた。橋をトラックなどが通ると石橋は少したわみ、通過後元に戻るが、それはあんこが大きな荷重の緩衝材になっていて、大きな荷重に対し、微小ながら上下左右に動くからである。まさしく空積み石造アーチ橋は、五重塔や超高層ビルと同じように、しなやかに荷重を受け止める柔構造なのである。

だが文献によると(『日本工学会誌』、日本橋には、石と泥が詰まっています。二つのキーストーンの岸寄りコンクリート、真ん中部分が煉瓦(れんが)構造になっており、内部をガチガチに固めてあるというのである。私は補修工事の現場を見てないが、東

京国道工事事務所のホームページに、日本橋の工事内容がわかりやすく掲載されていた。

また読売新聞(本年1月2日付け)では「舗装の基礎を削ると、きれいな朱色の煉瓦があらわれ、煉瓦同士をつなぐモルタルの目地は碁盤の目のように寸分のずれもなかった。工事を担当した清水建設の現場監督は、当時の丁寧な工事に身が引き締まり、自分たちも100年後に残る仕事をしたい」(記事要約)と補修工事を紹介していた。

日本橋は、100年の垢(あか)を落としてきれいになった。橋上を歩くと、路面上の焼夷弾(しょういうだん)の傷跡や高欄についた焼け焦げ跡などもあり、4つの地域から調達された橋の石材(白御影と赤御影)正確には薄茶の御影石の表面仕上げや加工の様子もよく分かり、角もはつきりしてきた。橋全体が明るくなり、確かに「日本橋」は若返った。

それにしても次の100周年までには、高架道路を撤去したいものだ。

※読売新聞の記事は、「勝鬨橋(かちどぎばし)をあげる会」会員の加藤豊氏の提供による。



補修後の日本橋 写真提供/伊東 孝

## 中面の案内

2面 本州最北端アーチ橋発見(吉田 晃)

3面 富士の湧水川の貴重な石橋遺構(末永 暢雄)

5面 珍構造の斜橋「桂橋」(上塚 尚孝)

6面 「中国・福建省の石橋調査」(尾上一哉)



大湊第一水源地堰堤 写真提供/吉田 晃

## 本州最北端アーチ橋発見

会員 吉田 晃(埼玉県)

### 大湊第一水源地堰堤(えんてい)

テレビの人気番組「開運!なんでも鑑定団」の番組の中で、ほんの一瞬だけ、青森県むつ市にあるアーチ橋が見えた。

それで「むつ市」という手掛りを手繰ると、その橋は1909年に完成した旧海軍専用の水道施設と分かった。その後1945年から1976年まではむつ市水道局の水源地で、現在は「むつ市水源地公園」となっている。見えたアーチは、公園の中の石積みダムに設けられた溢水口(いつすいこう)なのだ。

堰堤上部の幅は2.5ほどで、堤の高さは7.9ほど、長さは26.5ほど。日本では最初の厚アーチ式の石造堰堤。日本では堤高15以下を堰堤と呼ぶのだそうだ。

設計は海軍技師の桜井小太郎。現地での施工には、やはり九州から石工が呼ばれた。石材は、現代でも車で1時間ほどかかる山から運ばれた。当時自動車は、まだ普及しておらず、道路があつたわけでもない。どうやって運んだのか記録はない。謎である。

現在、ダムとしての規模、構造などは解明されているのだが、私の目には溢水口のアーチが堤頂の遊歩道と一体になって、美しい石造橋に見える。ダムは、それだけがぼつんと単体であるのではなく、上流から、さらには下流まで、側面・底面にも石張りを施したかなり広大な水源地設備らしい。今は、広々としたむつ市の水源地公園である。

いつか、岐阜県山岡町で見た小里川の第一発電所(会報56号参照)一帯の山中に張り巡らされた広大な石積みの施設。その中の輿運橋(ようんばし)だけは、新しいダムの横に移設保存されたが、それ以外は巨大ダムの湖底に沈んだ。

一方、むつ市の水源地は、そっくり公園になり、この堰堤は「旧大湊水源地水道施設」として、青森県文化財・むつ市文化財に指定され、取り壊しの危機は去つたようである。規模は小さいが、本当に美しい姿。本州の北の果てに、九州の石工の仕事が残る。いつか見に行きたいと思つている。

## 千葉県、埼玉県の石橋

会員 野田 民生(埼玉県)

### 協橋(かなえばし・かないばし)

1968(昭和43)年撤去

所在地 千葉県佐原市(小野川)

構造 和風の石造アーチ橋

石工 不明

架設年 1881(明治14)年

寄附金 4840円

竣工 1882(明治15)年

※1912(明治45)年の写真あり

### 寺坂橋(てらさかはし)

所在地 埼玉県本庄市内(元小山川)

構造 群馬県の神山石使用アーチ橋

現状 一部コンクリート補修

架設年 1889(明治22)年

設計者 パウナル?

※パウナルは、新越本線碓氷峠のれんが造りのアーチ橋を設計した英国人

## 日本一高所にあるアーチ橋

副会長 末永暢雄(長崎県)

### 妙見宮の車橋(妙見橋)

所在地 大分県玖珠郡九重町

架設年 1884(明治17)年

橋幅 0.7ほど、径間2.8ほど

環厚35ほど

石工 音津小太郎、稲見宇八

野上金作

※データは賛田岳和氏および石碑文

九重町と玖珠町との境に位置する宝山は高さ815.7ほど。ひよっこり盛りあがつたようなこの山には宝が埋められているという言い伝えがある。

この山の九合目付近(標高約800ほど)に石造りアーチ橋が架かっていると



妙見宮の車橋(妙見橋)  
絵/末永 暢雄  
※現地に絵のように見える場所はない

いう贅田岳和さんの情報に魅せられて山に登った。リュックには安全ベルトと、30サイズのロープが入っている。

山麓の宝八幡宮は、1300年前に宇佐神宮から分霊された由緒ある神社で、古来から多くの信仰を集めている。この神社の奥の院に当たる妙見宮(玉井神社)に石橋が架かっているというのだ。

宝八幡宮から登り始める。が、途中何回も「戻ろうか」と考えたほど、険しい傾斜。しかし、途中途中の末社の祠(ほくら)に力をもつ、「あと290」の案内板や「緑陰に声なき声の妙見社」といった碑に元気をもらって、やっと妙見宮にたどり着いた。ここまでの所要時間は約45分。

宝山の九合目付近は、せり出した岩が屏風のように立っている。岩の高さは40センチほどもあるのか、その中ほどを、張られたロープを頼りに進む。「妙見橋」はそうした岩山が3センチほど割けた、その中ほどに架かっていた。石造アーチをもとに、妙見宮の床が張ってある。裂け目の奥、いわゆる妙見宮が祀(まつ)られているところ、清水が湧き出している。この「霊水」を求め、古くから多くの信仰者がこの宮に昇っていたのだという。夏の土用三日には今でも「お水とり」が行われている。このために頑丈な床が欲しかった、そこで石造アーチということになったのだろうか。

アーチに使われている石は凝灰岩のようで、周辺の岩山から切り出したものではないようだ。従って、あの急な斜面を、そして危険な岩場を、石を担ぎながら運ぶ姿は想像だに難しい。ふと思いついて、あれこれ資料を探ると、どうやらこの石橋が、日本では一番高所にある石橋ということになる。

宝八幡宮の案内板には、「洞穴からは、玖珠盆地・くじゅう連山、わいた山などが遠望できる」と書かれている。しかし、周辺は雑木が繁り、遠望がかなわない。九重地域の方々と、近く伐採等を計画している。

## 富士の湧水川の貴重な石橋遺構

副会長 末永暢雄(長崎県)

### 柿田川眼鏡橋

所在地 静岡県駿東郡清水町(柿田川)

架設年 1909(明治42)年

橋長 54m(連数5)

径間 3・4m 橋幅 1・8m

環庄 30枚 環石数15個

石工 渡辺常吉(徳倉)

※村瀬佐太美氏著述より

※柿田川は別名泉川。狩野川の支流

### 架橋の背景

柿田川は水が湧き出す、川底の「わき間」を水源とする全長1・2kmの川。東洋一とされている湧水量は70〜100リットルに及ぶ。この川にアーチを一つだけ残した石橋が架かっている。「柿田川眼鏡橋」である。もともとはアーチが5つもあつたと聞いている。透き通った流れには梅花藻がたなびき、アユがキラキラと光りながら泳いでいる。トンボなどの水生昆虫も豊富だという。

そのすぐ上流に鉄の橋が架かっているが、この橋の上部や壁石にはクヌギなどの雑木が生え、湧き出す水の勢いある流れに必死に耐えている。石の橋がここに架かっていることなど他人は気が付かず、ほとんど見向きもしないままに通



柿田川眼鏡橋 絵/末永 暢雄

り過ぎていく。

上流に地蔵のような古い石碑が並んでいる。「柿田川三石碑」と呼ばれるもので、一つは1671年に建てられた石橋架橋記念碑である。教育委員会の解釈表示には、「泉川(柿田川)は流れが早く、渡るに危険が伴い命を落とす人が多かった。この難波を救おうと柿田泉莊院(廃寺)の住職良琛(りょうしん)は、堅い決意のもと広く浄財を集め、人々の助力を得てようやく石橋を築造した。このいきさつを記し、住民の安全を願い、良琛自身がこの碑を建てた」とある。

ここまで読むとギョツとなる。1671年に、この地にこのような石造アーチ橋が架けられたということになると、その技術が一体どこから伝わってきたのが問題になる。手元の資料では、当時はまだ金沢の「閼月橋」とげつきよう・架設年1642年頃)、江戸の旧水戸藩庭園内(後楽園)に「円月橋」(同1660年代)が架かっているだけ。両方とも中国人によって架けられたものようである。しかし、この柿田川眼鏡橋には、全く中国の影響は感じられない。

次に供養塔の案内文を読む。「石橋は幅が狭く(両側は目くらむ奔流)人や馬が落ちて溺死することが絶えなかった。人々が集まり観音経を二百万遍(べん)唱え亡き霊を弔った」とある。

この「石橋」が果たして、現在壊れてい

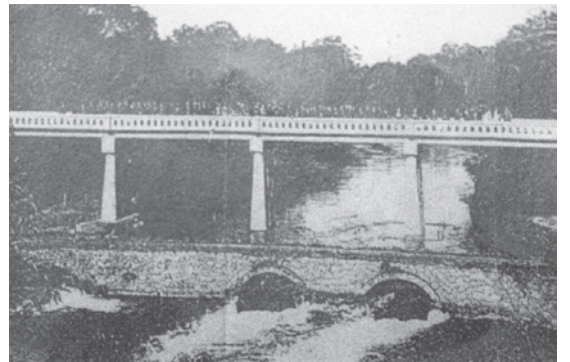
る眼鏡橋のことだろうか。そうとは思えない。橋の幅は1・8メートルあるのだ。

そこで次の碑の説明に目を移す。「柿田橋記の碑」となっている。これには「昭和9（1934）年建立。兩岸の坂は急橋は危険、人々は冷や汗を流し、恐るおそる渡らなければならなかった。柿田の久保隆作氏はこの窮状を見るに忍びず、巨額の資材を投じ鉄筋コンクリートの偉容と美観を誇る堂々とした橋を完成させた」

ここにも「橋は危険」という言葉が見える。では現在の柿田川眼鏡橋はいつごろ架けられたのだろうか。

実は静岡県の橋を見に行くという計画で、滋賀県の森野秀三さんに場所等を尋ねた折、場所に関する資料と一緒に兵庫県の村瀬佐太美氏の「日本の橋紀行」（土木施工37巻7号、1996・7）と題する著述がコピーされて送られてきていた。それを読むと、村瀬氏は柿田川眼鏡橋について、現地で詳しく取材していた。

その著述には、1909（明治42）年架設と書かれている。清水町役場からいただいた資料に、「明治17年に車道として木橋が架けられたが、維持管理が悪かったため橋は朽ちていった。明治42年に現眼鏡橋が地元徳倉の石屋、渡辺常吉により架設された。もちろん石材は地元特産の徳倉石（緑がかった安山岩）で、資金は



奥が完成当時のコンクリート製の柿田橋、手前が柿田川眼鏡橋。村瀬佐太美著「日本の橋紀行」（土木施工37巻7号1996.7）より

柿田と堂庭の人々が出し合っている」と書かれている。

では1671年に架けられた石橋とは、どのような橋だったのだろうか。私は、「任職良琛は、堅い決意のもと広く淨財を集め、人々の助力を得てようやく石橋を築造した」、また「石橋は幅が狭く人や馬が落ちて」とあることから判断して、石桁をつないだいわゆる「沈み橋」であったのではないかと推測している。

### 橋の特徴

この橋を眺める時、愉快な特徴が二つみられる。まず一つは、多連の橋の形状である。柿田川眼鏡橋にはかつて、5連のアーチがあったとされている。当然多連となると、橋脚がある。ところが、この橋の場合の橋脚は、いわゆる九州各地で見られる多連アーチ橋の橋脚とは異なっ

ている。川に石垣を渡し、そこに水門として穴をあけたような形状である。（写真参照）

ここで思い起こされたのが、葛飾北斎が描いた当時琉球王国の「長虹堤（ちようこうてい）」だった。もちろん、この長虹堤が架橋に影響しているとは思わないうことは特筆に値すると思う。

二つ目は、橋の全体が、上流に向かって弧を描いているということ。これは、中央の水門に大きな水圧がかかるために、水流を外へ逃がす設計だろうと思われる。完成当時の写真には写っていないが、その両端に三つのアーチがあり、水車用の水門になっていたという。この水車への水の勢いもこうした形状から生まれるのだ。

### 復元と継承

さて現在、アーチを一つ残すのみで柿田川眼鏡橋は、「石橋」という美しい形を想像するにはあまりにも哀れな姿で残っている。アーチがなぜ壊れたのかについて、先の村瀬氏の著述には、町吏官からの説明を受けたとして「昔、漁業のため発破をかけた人が薬量を間違えた結果」と書かれている。

ただ私は、それで納得できないのである。その理由を3つ挙げる。

① 柿田川のこの辺りは、1日に100

万近い水量がある。それだけの水量になると水圧によって、基礎の石垣に浮力が生じる。この浮力によって石がずれ、アーチが緩んだのではないか。

② この水圧から石垣を守るための「水制工」が作られていない。橋脚に当たる部分の水圧が高く、この水圧によって橋脚が壊れたのではないか。

③ 漁業に使う発破の薬量程度で、石橋が破壊されるとは到底思えないなどの考察からである。



この石橋の処置について、清水町は村瀬氏に「現位置保存する計画がある」と語っているが、それからすでに15年の歳月が流れている。中央の二つの水門からは、まるで洪水の時のような強い流れがあった。よく観察すると、現在一つだけ残っているアーチの輪石と基礎とがずれている。このままでは、さほど遠くない時期に、残るアーチも崩れてしまいそうに思われる。

すでに述べたように柿田川眼鏡橋は、日本では珍しい形状の石橋であり、また、江戸時代から、何とかして人々を安全にこの川を渡したいという先人のたゆまない労苦が石碑等に残っており、この石橋の架橋に至る経緯などを記した案内板の設置を含め、すばらしい文化財としてよみがえる日を楽しみに見守りたい。



大久保自然石橋 写真提供/贄田 岳和

## 「大久保自然石橋」の修復

事務局長 上塚尚孝(熊本県)

9月20日の昼「橋の修復ができました」と電話があった。声の主は副会長の橋本幸一さん。石匠館近くの「大久保自然石橋」(熊本県八代市東陽町北)の現場からだと言き、すぐに出掛けた。平成19年と本年、夏の集中豪雨のたびごとに、「大久保自然石橋」の姿は貧弱になっていった。石工、橋本勘五郎の作品が原型をとどめているうちに、修復の必要があり、勘五郎から5代目の幸一さんならば適任、と先に依頼しておいたのだった。

現場は山の中で、細い流れは山砂を湿らす程度。修復された自然石アーチは、付近から集めた石材で路面を補充し、頑丈になっていた。ちなみに指を広げて計測してみたら径間0・5m、幅員1・5m。中一日おいたところで、アーチ上流側の開口部に手を加えてもらい、埋もれていたアーチが貫通した。さらに、大量の雨が流れ込んで崩壊しないようにするため、丸太などを組んで保護対策を講じてもらった。



白髪岳自然石橋 写真提供/上塚 尚孝

## 珍構造の斜橋発見

事務局長 上塚尚孝(熊本県)

今春、会員の黒肥地改太郎さんへ「めがね橋あり」の情報が届き、確認のため



桂橋 写真提供/上塚 尚孝

### 桂橋(かつらばし)

所在地 熊本県人吉市古仏頂(寒川)  
架設年 1925(大正14)年  
径間約3.9m、拱矢約2.3m、  
輪石数(左から)9・1・9列

黒肥地さんが現地へ赴かれたところ、その橋は珍しい構造の石造アーチ橋だったとのこと。通常、橋は河川の流れに直角に架設す

るが、この橋は流れに対し斜めに架けられた「斜橋」であった。昔は伐採した木材を牛馬に引かせ、川沿いの細い道を伝って搬出していたが、橋のある場所で牛馬は直角に曲がれないため、河川の流れに対し橋を斜めに架けたらしい。またアーチの断面が、階段状になっているのも珍しい。路面はコンクリートで拡幅されている。

なお同会員は、人吉市木地屋を流れる椿谷川の私有地にも、5基の石造単一アーチ橋を確認された。その後、会員の贄田岳和さんが再確認し、計測を済ませて

種山の石工達は、この天然アーチをヒントにして、石造アーチを造れないかと試行錯誤したでは…と、推理を働かせたくなる。なおこの橋は、八代市の天然記念物に指定されている。

# 中国・福建省の石橋調査

日本の石橋を守る会十熊本大学調査班

会員 尾上一哉(熊本県)

2010年10月18日、中国の厦門(Amoy)空港を離陸し、間違いなく「オタク」と呼ばれるであろう、石橋調査クルー全員が帰路についた。上海(Shanghai)で乗り継ぎ、浦東(Pudon)空港から出国する寸前の午後6時頃、日本から電話があった。「尖閣諸島問題に起因する反日デモや暴動が中国各地で起きているが、無事か?」という内容だ。デモは早朝から始まったらしいが、ガイドから何も知らされず、ニュースで報道されることもなく、情報絶縁状態を体感した。

中国から帰国する前日午後、日本の石橋を守る会会員と熊本大学調査班は、福建省の山奥にいた。今回の探訪の最大の目的である「金山大橋」の前である。橋の両岸には集落があり住民も数人見かけたが、話しかけようとするクルーはいなかった。初めて見る巨大な石橋を目の当たりにし、会釈もそこそこに橋のたもとへ、河原へと駆け下りて行った。

日本ではワンス・パンが最大32メートルだが、中国ではス・パン100メートルクラスのアーチ石橋が、しかも道路橋として現存するというのだ。誰も口には出さないが目の前の石橋に疑念を抱きながら、なめ回す

ように撮影し、観察し、情報収集をしてきた。

果たして金山大橋は、本物の純粋な石造アーチ橋だった。大陸と日本に自然条件の違いはあるものの天然の石材で大径間の橋ができることが、確かに実証さ



金山大橋(中国・福建省) 架設1972年、橋長150m、径間99m

れていた。日本国内で、道路橋としての石橋を設計し施工する計画の完成に向け、十分な確証が得られた。私自身、かすかに抱いていた不安がなくなった。同行してくれた王(Wang)さんが、道路橋としての石橋の設計に関する中国の資料を紹介してくれることになり、さらに計画に弾みがついた。

一方で不安な情報もあった。2007年8月13日に、中国で建造中の延長約400メートルの石橋が崩壊して以降、中国では石橋建造が中止されているという。日本ではこれから石橋を復権させようという時に、残念な出来事である。この原因や改善経過を調査・解決しておく必要も出てきた。

しかしこのことは、中国の設計基準を補強・改善することになり、日本国内の石橋建造の信頼性を高めることにもつながる。より確実な設計基準策定のために、積極的に全実容解明すべき事故だったのかもしれない。

後で気づくのだが、金山大橋のたもとには至る所に残飯や汚水・排水、家禽(きん)・家畜のし尿が垂れ流され、強烈な異臭を放っていた。遠景で見るとこの石橋の威厳と気高さを、打ち消すに余りあるほどの人間の営みの凄まじさ。50年ほど前の日本もこうだったのだろうか。

今回の石橋探訪調査で、アップル社の「iPad」(タブレット型情報端末)の



中国・福建省の石橋を訪れた調査班

功績は大きかった。GPS地図情報は、多くの石橋の探索時間の入口を完璧にゼロにし、上空から俯瞰(ふかん)しているような錯覚にもとらわれた。撮影した画像をその場で取り込み、拡大して照査するなど、調査の精度も格段に上がった。ほんの一部の機能しか使っていないのだが、これはもう軍事精密兵器ではないかと、ガイドと顔を見合わせた。

事実、中国では腕時計型や携帯電話のGPSを使っていた日本人が共産党員に通報され、軍に逮捕された事件が数件あったことを、帰国してから聞かされた。

中国国内を移動中、中国軍車両の運転席にカメラを向けると、手を振ってくれたので数枚撮影したが、ガイドによると「撮るな」という警告だったそうである。通報されれば、検問で止められ、拘束される可能性は100%のお国柄である。共産圏へご出張の折は、精密機械の取扱いは、くれぐれもお気を付けを…。

# 「丸林目鑑橋」との出会い

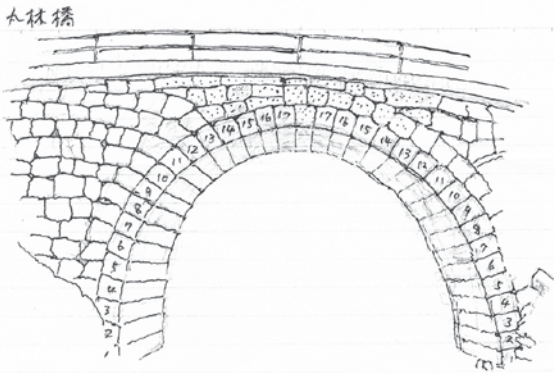
「こん橋は、いつ頃架けたつてしょうか」  
「明治よか前ですばい。古つござるますけん」

「向こうん丸山さんに聞くなり分かりやしませんどか。昔の庄屋ですけん」

「はあい、あすこにや昔のこつ書いたつて残つとつですけん」

寺参りの帰りというお年寄りたちからの情報を得て私は、あなたに見える家を訪ねることにした。40年前の話だ。

水晶山南麓の丸山さん宅(熊本県宇城市豊野町)には、和紙をつづつた一冊が保管してあった。表紙には「弘化五年年代記写」。記載は寛文から弘化年間までは簡潔な文が続ぎ、嘉永以後は詳細な文



丸林目鑑橋 イラスト/上塚 尚孝

※「丸林目鑑橋」の所在地は、熊本県宇城市豊野町(小熊野川)。架設は1857(安政4)年

判断基準ができた。渡り初めの記録を見ると、農民が牛や馬を引き唄い手もいる。めでたい上に賑やかな光景である。こんな記録は庄屋宅に決まって残っているのだろうか。もしそつだとしたら有り難い。



章になつている。筆者は目鑑橋の分だけをメモさせてもらったが、「馬門橋・二又橋・鬼迫橋・下休橋」と書き写していくと胸が高鳴り、ペン握る手が汗ばんできた。「安政四年 丸林目鑑橋」の文字を目にしたときは、先ほどの橋のことだと分かり体が熱くなった。

支保工を組んだのは下郷村の新十郎で石工頭は今村の嘉左衛門、共にここ中山手永在住の技術者だ。工期は、11月10日から地搗(つ)きを始め、12月7日朝に仕上げて渡り初め。何と一か月弱で竣工している。長さ15m、径間8・6m規模の目鑑橋なら工期は約1カ月と

# 戦争とめがね橋

## 空襲に備えて通潤橋を守つた話

通潤用水の恩恵を受ける白糸台地、熊本県上益城郡山都町田吉に住む、村上末春さんに会い、「戦時中、米軍機の空襲で通潤橋を破壊されては大迷惑と、橋をカムフラージュしたと聞きますが…」と尋ねた。

村上さんは「私は見ていませんが、白藤の山下市郎さんから聞いた話では、敵機から見えないように孟宗(もうそう)竹の上半分、つまり笹が付いている小枝のあたりを切つて並べ、橋を覆い隠したそうです」「敵機は通潤橋の約500m北の、現在の矢部高校の校舎を狙つて空襲をしたようですが、焼夷弾(しょういだん)の束が西へずれて運動場を越え、空中で炸裂(さくれつ)して被害が出ました。ただ幸い、通潤橋は無事でした」と当時のことを話してくれた。

## 橋下に避難した話

宇城市小川町中小野の集落11軒は、空襲警報を聞くと、老若男女連れだつて娑婆神(さばがみ)峠の上り口にあつた中小野橋下へ避難したそつだ。これは、同地在住の徳永寿一さんの証言。

細い谷合川は、両岸から繁茂した木や竹に隠れ、石造アーチ下は、涼しい安全地帯だつたらしい。なお、この橋は、峠越

えして豊野町へ通じる道路改修計画時に取り壊された。なお、上流に架かる娑婆神橋(さばがみばし)は現存。

## 橋で出征兵士を見送つた話

10年以上も前になるが、有志が中心となつて、霊台橋(熊本県上益城郡美里町)の架設150周年の祝賀会を催した。その会に出席していた、北川浩一郎さんから聞いた話は悲しかった。

戦時中、霊台橋を出征兵士が何人も渡つて行き、その都度、小国民は日の丸の小旗を振つて見送つたそつである。ところが、戦争が終わつても帰還しなかつた勇士が何人かいると、北川さんは嘆く。鎮魂の想いを込め、北川さんはアーチの下の緑川にコイを飼い、早朝餌を与えに来るのがの日課だといふ。

この話に耳を傾けた知人の句：  
兵たりし老の草笛ふと止みぬ 松を



# 見たり、聞いたり、

舞鹿野田と小夏原  
会員 井澤るり子(熊本県)

「舞鹿野田橋(もうかんだはし)」がある地区は、熊本県上益城郡美里町仁和田字小夏である。別の場所に「舞鹿野(もうかの)」という地区があるのに、なぜ「小夏」地区に舞鹿野田橋があるのかが不思議だった。それで小夏に住む吉田通雄さん(故人)に、何度かその由来を聞いてみた。しかし「知らんなあー」の繰り返し。ところがある日、タクシーの中で吉田さんに、また同じ質問を試してみたところ、

「昔、あの辺りの田んぼを開くとき、舞鹿野の人たちが手伝ってくれた。それからその一帯を、舞鹿野田と呼ぶようになった」と教えてくれたのだ。舞鹿野地区には「小夏原(こなつばる)」という地区もある。吉田さんが話す昔が、いつなのかは定かではないが、過去の共同作業の事実が地名として残っていたのだ。地元の人に話を聞くことの大切さと面白さを感じた。

舞鹿野地区には「小夏原(こなつばる)」という地区もある。吉田さんが話す昔が、いつなのかは定かではないが、過去の共同作業の事実が地名として残っていたのだ。地元の人に話を聞くことの大切さと面白さを感じた。

## 石橋を詠んだ句

霊台橋支う岩根の夏すみれ 未痴男  
菜の花や濡れて石橋重くなる 愛佐子  
河鹿鳴く棚田を繋ぐ石の橋 三溪

## アーチの影がハートの形に

熊本県下益城郡美里町の「二俣橋(ふたまたはし)」は、訪れるたびに、ため息が出るほどの演出を見せてくれる…。  
…大好き。



二俣橋は11月～2月の午前11時頃、アーチの影がハートの形に…  
写真提供/井澤るり子

## 編集後記

東日本大震災の被害に遭われた会員がいらつしやるようです。早く元の生活を取り戻せるよう、一日も早い復旧復興をお祈り申し上げます。(一)

右文は本号(78号)第1版の編集後記からの抜粋です。第1版は「日本の石橋を守る会」の第32回大会用に4月23日に発行されましたが、同大会で新たに発足した広報部が第2版を作成しました。それは、将来の会報アーカイブ作成を見据え、レイアウトを79号に統一したいという考えによります。

そのため、本号を大変お待たせしたことを、お詫びいたします。

(会報担当 中村まさあき)

# なぜ、石橋を守るのか…

事務局長 上塚尚孝

江戸時代のこと、大雨のたびごとに流された土橋を見て、村人は「何年たっても壊れない橋が欲しい」と願った。その願いを実現しようとして物庄屋は立ち上がり、「永代不朽の橋を架ける」と心意気を示し、橋造りに励んだ。民衆、総庄屋、石工、大工が願った永代不朽の石造りアーチ橋は、完成すると、川面に影を宿し円相を描き、利用する人々を喜ばせ、和ませた。すなわち石橋は「用と美」を兼ね

備えた建造物であり、世界に数多く分布する石造文化の一つ。そして人々の心をつなぐ貴重な宝物と言える。

昔、ローマ人は建造物を評価するとき、①実用性があるか、②堅牢であるか、③姿・形が美しいかを基準にしたという。石造アーチ橋はどうだろうか。

①石橋は一般的に人や車を渡し、水路橋は用水を渡す。実用性は十分当てはまる。②耐用年数100年超えた石橋は数多く現存し、木造橋や鉄筋コンクリート橋より断然、堅牢性で実績がある。③半円のアーチが川面に映って円を描く姿は美しく、無駄を省いた橋本体にも見られる。重厚な石の質感も魅力十分だ。

会員 井澤るり子(熊本県)

「なぜ、石橋を守るのか？」と問うと、「答は決して一つや二つではない」と言える。それだけは確か。

草ぼうぼうの石橋が、人が訪れるようになると不思議と手入れが始まる。地元の人にとっては普段、石橋を気にすることもないのだが、他郷の人がわざわざ訪ねて来て、しきりと写真を撮るようになると急に気がなり始めるようになった。橋にごみが捨ててあったり、草が茂っていると、地域の住民としての「恥」を感じてか、手入れを始めるのであろう。

小さな石橋でも、私たちが訪ねてみることに。それが石橋を守る一歩では？

## 日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報78号(通算) 2011(平成23)年4月23日第1版発行  
同年6月30日第2版発行

代表者 会長 甲斐 利幸  
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2  
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360  
http://www10.plala.or.jp/narit/